



ユニバーサル・デザイン その幻想と現実

SYUNKEN
駿建

1999.11 Vol.27 No.3 秋期号
日本大学理工学部 建築学科
短期大学部 建設学科建築コース

『ユニバーサル・デザイン』について知っていますか。米国では1970年代には、すでにデザインの潮流として、デザイナーや設計者はもとより、すべてのデザインプロセスにかかわる人たちの間で広まっていたといわれています。日本では、3年ほど前から工業デザイナーや建築関係者によって、マスコミなどでも大きく取り上げられるようになりました。

そもそもこのデザイン思想はなんなのでしょう。実は、ユニバーサル・デザインは「思想」であるために、多くの人たちがさまざまな解釈をもっているのも事実です。おおかた共通する概念として「すべての人を対象とした、利用しやすい製品・建築、空間のデザイン」であるということです。提唱者とされる、米国のデザイナー ロン・メイス氏は、次のように述べています。

- ・あくまでも概念であり方法を示唆するものではない（目標を数字で表さない）
 - ・多様な人に対する適応を目指すために柔軟性が必要
- そしてその原則は、
- ・物（空間）を使用するにあたって、誰もが公平な使用ができる

かみくだいて言えば、もののデザインを年齢、能力といった違いに対応できるように、初期のデザイン段階で考慮すれば、その商品は特別なものでなく、一般商品として広まり、結果的に市場が大きくなり、コストダウンとなるということです。つまり、高齢者や障害者が使えるものが、あたりまえのデザインとなることの利点です。

ところが、こうした概念を知れば知るほど、実際にものづくりをするデザイナーや設計者を悩ませることになるのです。設計時に「ユニバーサルであること」にとことんこだわると、ある利用者にとっては「かえって不便」なものとなる可能性があることに気づくのです。

ギザギザのついたシャンプー・ボトル、点字の表示された電化製品のスイッチ、視覚障害者用誘導ブロックや階段の横にあるスロープなどが、いずれもユニバーサル・デザインを目指してはいるがそうになっていないことはもう理解していただけるでしょう。

「ユニバーサル・デザインの技術的な手法をちゃんと知りたい」という人に、長年、障害者一人ひとりに合った生活用具をつくっている人が「個々の障害や高齢者の特性をきちんと知っていなければ、ユニバーサルなデザインには近づけない」と断言していました。もっともなことだと思いました。私たちものをつくる者は、こうした一人ひとりが求めているものはなにか、といった要求を的確に把握して、設計に生かしていくという、まさにものづくりの原点を、日頃忘れていなかったかを強く感じました。

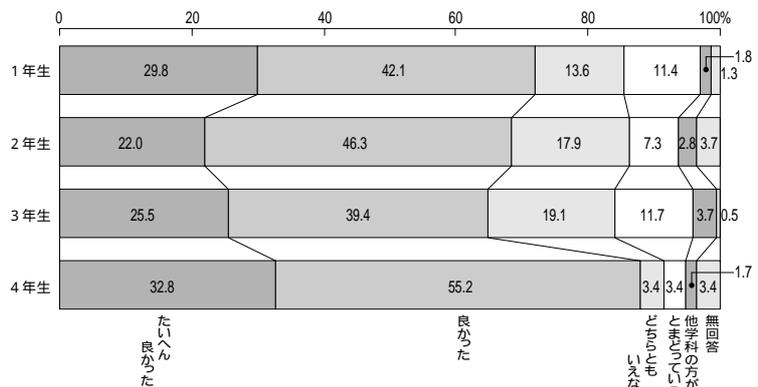
（助手・八藤後 猛）



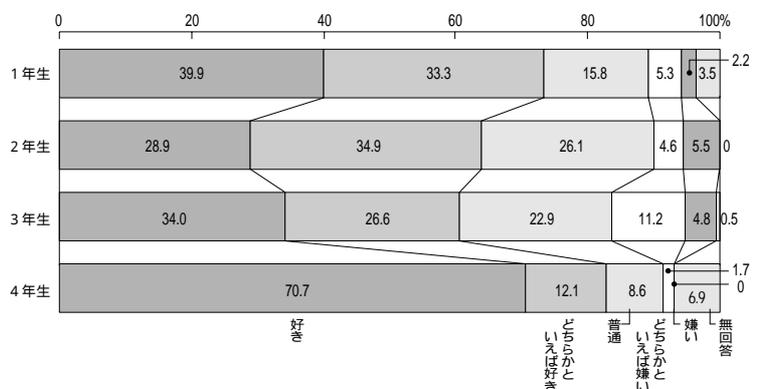
デザイン基礎 建築設計等科目に関する調査結果

このたび建築学科では、デザイン基礎、建築設計等科目に関する調査を学生に対して実施しました。これは、現行の建築設計等の科目に関する意見を学生から聞き、今後のカリキュラム編成、講義自体の進め方などの参考にしようとするものです。以下に、調査結果の概要を示します。グラフは、選択回答部分について、各学年別に単純集計を行った結果を示したものです。なお、記述式の設問に関する結果報告は別号に改めてご報告します。

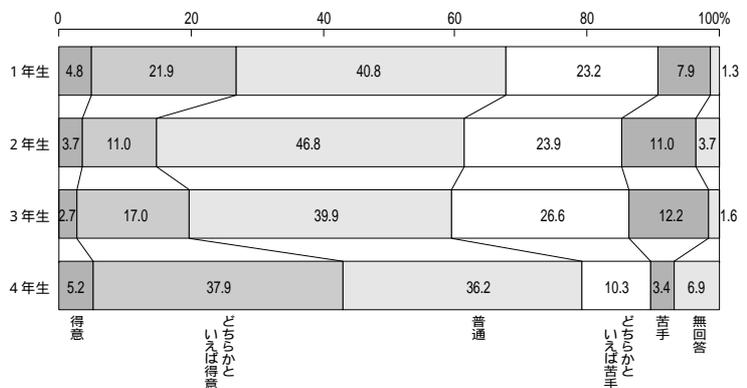
(1) 建築学科に入ったことに対する評価
「たいへん良かった」「良かった」とした割合は、1年生71.9%、2年生68.3%、3年生64.9%と学年が上がるにつれて減少する傾向にある。また、それにしがたい「他学科の方が...」とした者も1年生では1.8%にとどまっているが、2年生2.8%、3年生3.7%と漸増している。設計を選択している4年生では、「たいへん良かった」「良かった」とした割合は、88.0%と高かった。



(1) デザイン基礎、設計等の科目が好きか
「好き」とした割合は1年生39.9%、2年生28.9%、3年生34.0%となり、2年生においていったん10%以上落ち込むものの、3年生では再び増加している。しかし、「好き」「どちらかといえば好き」を合わせると、1年生73.2%、2年生63.8%、3年生60.6%となり、漸減傾向にある。4年生では、「好き」とした割合は70.7%と当然のことながら高く、「どちらかといえば好き」を合わせると82.8%ときわめて高い割合になる。なお、4年生においては選択内容によって「建築」「群」「CAD」の3系列に分かれているが、「好き」とした割合は、「建築」80.0%は、他の「群」66.7%、「CAD」50.0%と比較し、とくに高率である。

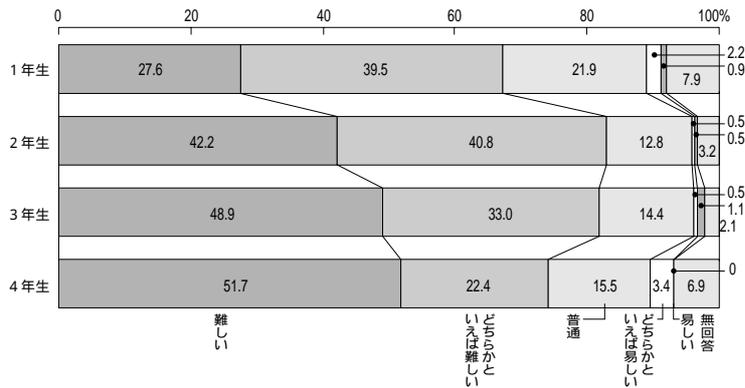


(1) デザイン基礎、設計等の科目は得意か
1～3年生では「普通」とした割合が最も多く、1年生において「普通」40.8%、2年生では46.8%とやや高い。次いで多い回答は「どちらかといえば嫌い」が、3年生までの各学年において全体の1/4程度あり、学年が上がるにつれて漸増している。しかしながら、それとは逆の「得意である」「どちらかといえば得意」とした者は、これらを合わせた割合が、2年生において14.7%と、1年生26.7%、3年生19.7%と比較して著しく低いことが特徴である。なお、4年生では「得意である」「どちらかといえば得意」とした者の合計は、43.1%で高い割合となっている。



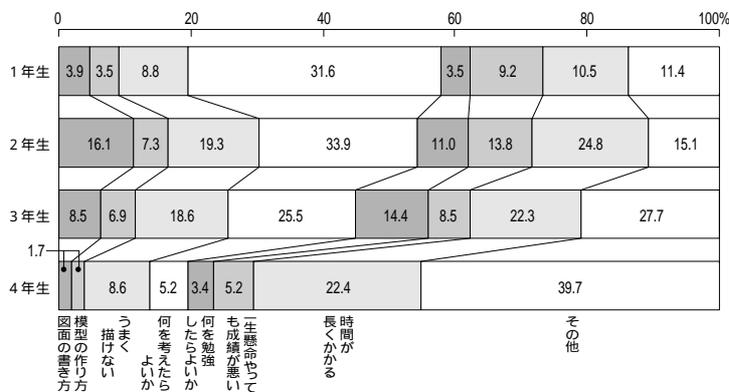
調査方法

1999年7月に、建築学科1年生～4年生の学部生に対し、デザイン基礎、建築設計、設計演習などの設計関連科目の受講者に対し、以下の結果に示すような質問を無記名のアンケート方式で実施した。アンケートは、講義時間中に出席者全員に配布し、回収は配布日、もしくはその1週間後に回収箱により回収した。したがって、3年生以下は調査時点においてこれらが必修科目であるため、全員が調査対象となっている。しかし、4年生については、とくに設計を希望し、選択している者が対象となっていることから、他学年より有効回答数が少なくなっていることと、回答の傾向が、他学年と大きく異なることについて、あらかじめご承知おきください。



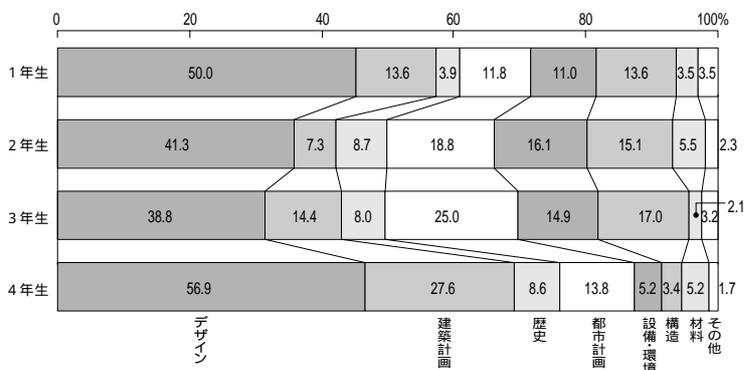
(1) 難しいですか

「難しい」とした割合が、1年生27.6%から、2年生42.2%と急増する。その後3年生においても48.9%と漸増していく。しかし、この項目が特徴的なのは、設計を選択している4年生においても、この率は51.7%とさらに高くなっていくことである。また、前項同様4年生においては、「難しい」とした割合は、「建築」60.0%は、他の「群」44.4%、「CAD」40.0%と比較し、とくに高率である。さらに、「難しい」「どちらかといえば難しい」を合わせると、1年生67.1%、2年生83.0%、3年生81.9%と、いずれの学年においても高い率となり、難しいと感じている者が各学年とも多いことがうかがわれる。



(1)-A 何が難しいと感じるか(複数回答)

1、2年生では、「何を考えたらよいかわからない」が最も多く、いずれも30%を越えているが、3年生では25.5%と少なくなる。3年生、4年生は、「その他」が最も多く、とくに4年生では39.7%を占めた。それ以外の特徴的な項目をあげると、「時間が長くなる」が1年生では10.5%とまだ少ないものの2、3、4年生はそれぞれ24.8%、22.3%、22.4%と20%を越える。同様に、「うまく描けない」2年生、3年生においてそれぞれ19.3%、18.6%と多い結果となっている。次いで、「一生懸命やっても成績が悪い」が2年生において13.8%と比較的めだつことが特徴である。

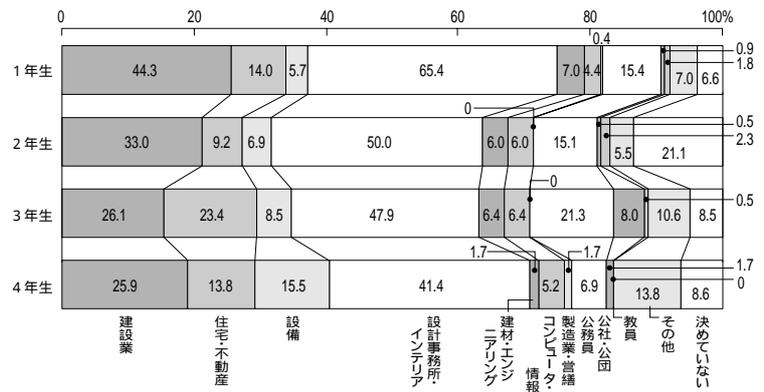


(1) どの分野に興味があるか

どの学年も「デザイン」とした割合が最も多い。しかし、この割合は1年生50.0%が、2年生において41.3%と減少し、3年生においても38.8%とさらに減少していく。しかし、その一方で「歴史」、「都市計画」などは学年が上がるにつれて急増し、都市計画は3年生において25.0%にまで増加する。他にも、「設備・環境」、「構造」なども漸増していく傾向にある。「建築計画」は、1～3年生において10%前後であるが、4年生では27.6%と、「デザイン」を除外すれば、圧倒的に多くなる。とくに4年生の「建築」選択者では「建築計画は36.7%」と、他と比較して最も多い。

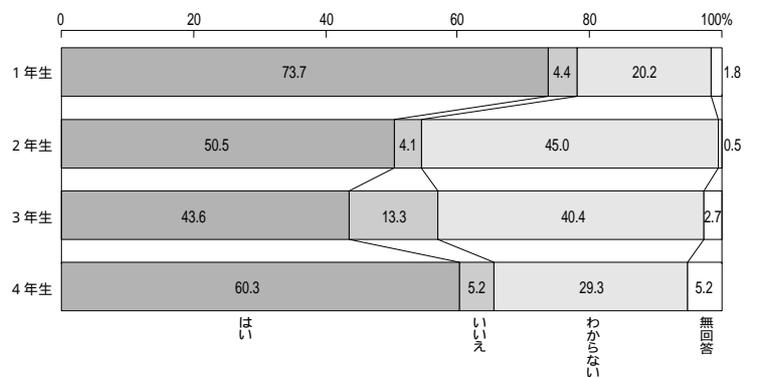
(1) どの分野に就職したいか

どの学年も「設計事務所・インテリア」とした割合が最も多かった。1年生では65.4%を占めたが、この割合は学年が上がるにつれて減少し、設計を選択している4年生においても41.4%と3年生より低くなっている。次いで「建設業」が多く、1年生においては44.3%とかなり高い割合であるが、同様に学年が上がるにつれて減少し、3年生においては26.1%、4年生25.9%となる。「住宅・不動産」も1年生から14.0%と比較的多いが、2年生でいったん減るものの、3年生では23.4%と3番目に多い分野となる。また、4年生に顕著に多い分野は、「設備」15.5%と他学年より多い。これは、「群」において44.4%と顕著に多いことによる。



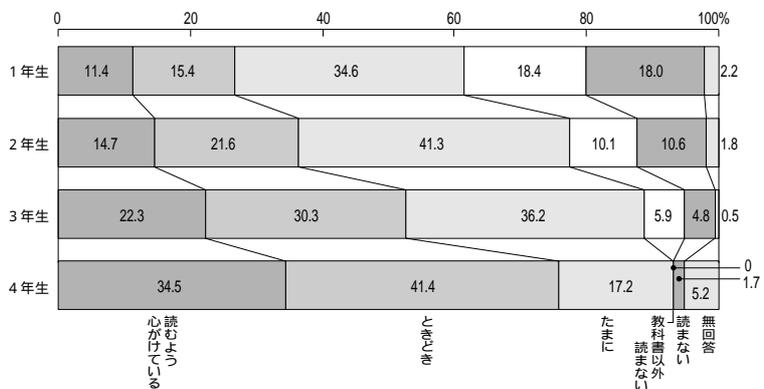
(1) 将来設計の仕事をやりたいか

各学年とも「はい」と答えた者が、最も多かった。とくに1年生では73.7%に達している。その後2年生50.5%と急激に少なくなる。ただし、これは「わからない」とする答えが多くなるため、「いいえ」とする者が増加しているわけではない。さらに3年生では43.6%とそれよりやや減少する。とくに明確にやりたいとは思わない意志を表す「いいえ」とする割合が3年生では13.3%と、他学年の3倍ほどの高い割合となっている。



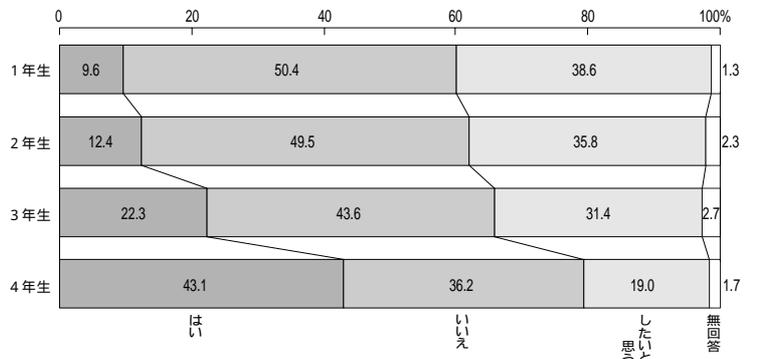
(1) 建築関係の専門書を読むか

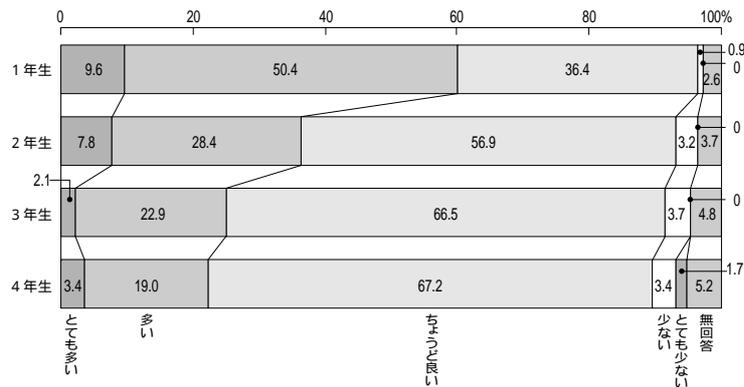
1～3年生では「たまに読む」が最も多く、それぞれ30～40%である。しかし、4年生はそれより頻度の高い「ときどき」が最も多く41.4%となる。より積極的な姿勢を示す「読むよう心がけている」割合は、1年生11.4%から学年が上がるにつれて確実に増加し、2年生14.7%、3年生22.3%となり、設計を選択している4年生では34.5%であった。



(1) 建築関係のアルバイトの経験

1年生では経験がある「はい」が9.6%であったが、これについても学年が上がるにつれて増加する傾向にある。2年生では12.4%と増加率は少ないが、3年生では22.3%と一気に倍増し、4年生ではさらに倍増し43.1%となった。ただし、明確にやりたくない意志を示している「いいえ」については、各学年とも40～50%程度とあまり変わっていない。はじめから明確にやりたくないとしている者は、学年が上がっても結果的にあまり変わっていないことがうかがわれる。

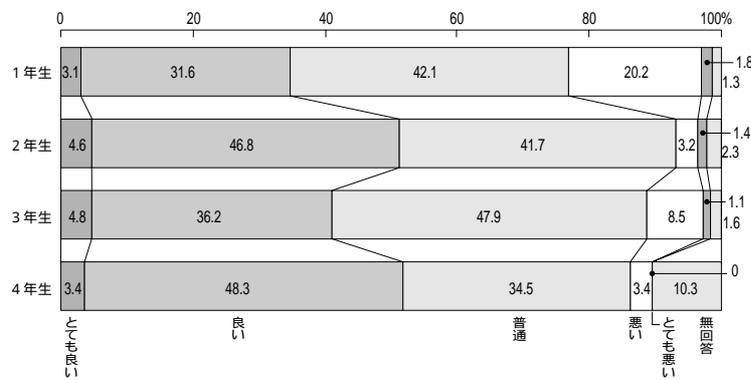




(2) 課題数は

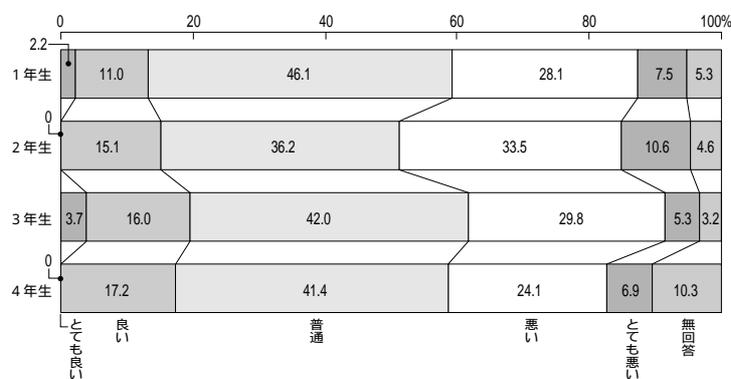
1年生で「多い」が50.4%を占めた。しかし、2年生以降この割合は減少し、2年生では28.4%に激減し、3年生22.9%、4年生19.0%となっていく。

2～4年生では「ちょうど良い」が最も多く、それぞれ56.9～67.2%となり、現状ではほぼ適当としている者が多い。



(2) Aテーマ設定の評価

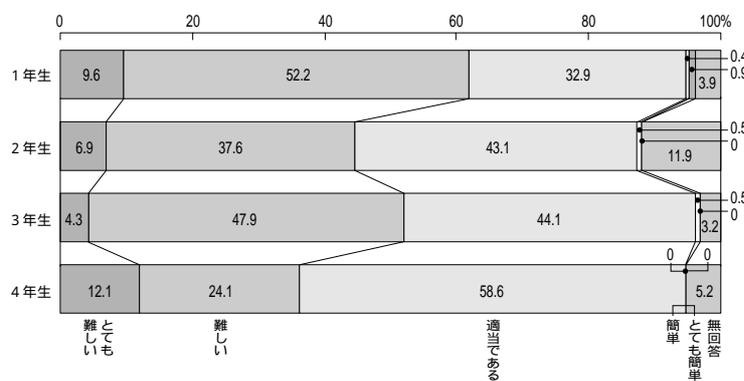
「とても良い」「良い」を合わせると、1年生では34.7%、2年生では51.4%と急激に多くなる。しかし、3年生では41.0%と減少し、4年生では再び51.7%に増加する。



(2) B小課題を数多くやることに関する意識

「とても良い」「良い」を合わせると、1年生では13.2%、2年生では15.1%、さらに3年生では19.7%と漸増していくが、必ずしも多いとはいえない。4年生においても17.2%と減少している、積極的な評価は少ない。

どの学年も、どちらとも評価しがたい「普通」が最も多く、その選択肢だけで各学年ともおおむね40%以上になる。

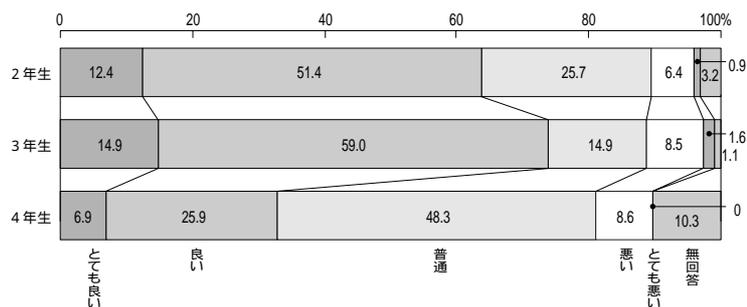


(2) 課題内容の難しさ

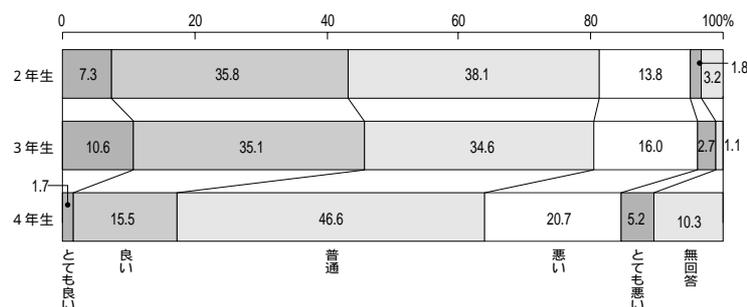
「とても難しい」「難しい」を合わせると、1年生では61.8%を占めている。さらに、2年生44.5%と減少していくが、3年生では52.2%と再び多くなる。4年生は36.2%となっていて、他学年と比較すると難しいとしている割合は少ない。

しかし、「とても難しい」とした者だけで比較すると、4年生は12.1%となり各学年中で最も多い。

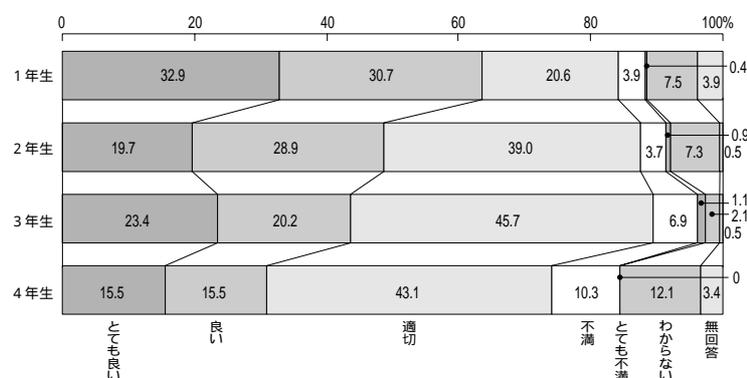
(2) A 敷地は、すでに決まっていることについての評価(1年生は回答除外)
 2年生,3年生では「とても良い」「良い」とした評価は、いずれも3年生のほうが多く、3年生では「とても良い」14.9%、「良い」59.0%と多くが、あらかじめ決定していることを支持している。しかし、4年生では他学年と比較して「とても良い」「良い」とした割合は32.8%と少なく、どちらでもないとした「普通」48.3%が多く、敷地があらかじめ決定していることについては、あまりこだわっていないようである。



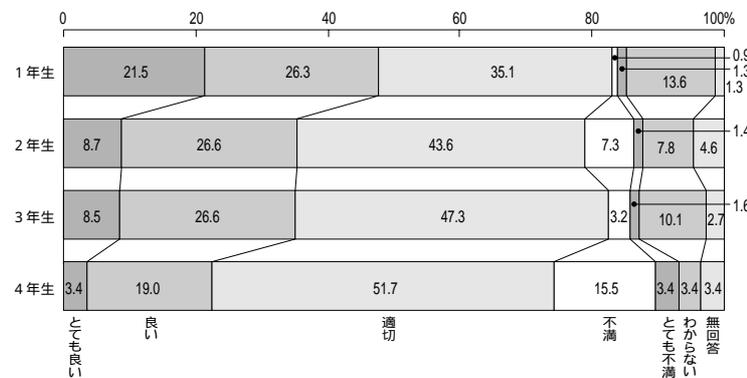
(2) B 設計条件が細かく決まっていることに関する評価(1年生は回答除外)
 2年生,3年生では「良い」「普通」がそれぞれ35%前後の割合を占めている。2年生,3年生間ではあまり差がない。4年生では「良い」とする割合が15.5%と少なくなり、相対的に、どちらでもないとした「普通」が46.6%と最も多くなり、前項同様、必ずしも細かく決定している必要は感じていない。

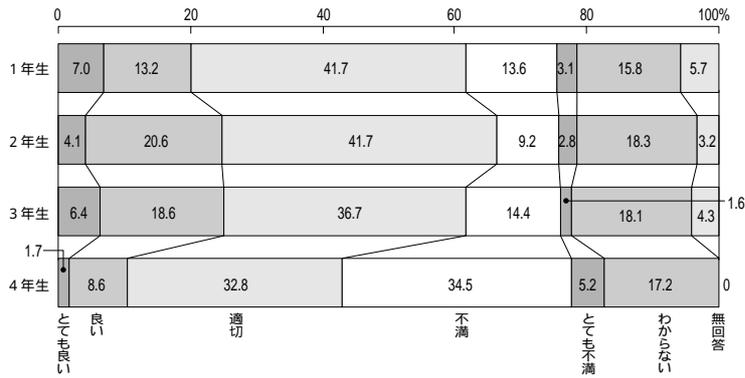


(3) 必修科目であることに関する評価
 1年生では現状を肯定している「とても良い」「良い」が合わせて63.6%となり多いが、2年生になると48.6%と激減する。減少傾向は3年生になっても続くが、「とても良い」と現状を大きく評価している割合にだけ着目すると2年生より割合は上昇している。しかし、4年生になると「とても良い」「良い」の割合は、31.0%となり、最も少なくなり、これは1年生の半分である。「不満」とした者は、10.3%と最も多くなっている。設計を選択している4年生ほど必修科目とすることに否定的である。



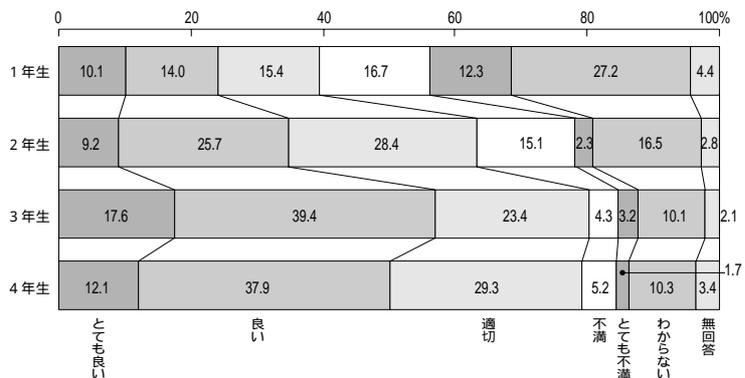
(3) 段階制であることへの評価
 学年ごとにカリキュラムを段階的に積み上げる現行のやり方に関して、肯定的な「とても良い」「良い」「適切」を合わせた割合が最も多いのは、1年生であり、合計で82.9%にのぼっている。しかし、この評価は学年が上がっても変わらないものの、「とても良い」といった積極的に肯定する者の合計は、1年生21.5%から、2年生8.7%、3年生8.5%と減少する。4年生においても、比較的肯定する者の合計の割合は、他学年と比較して大きな差はないものの、同様に「とても良い」とした者は3.4%と最も少なくなっている。





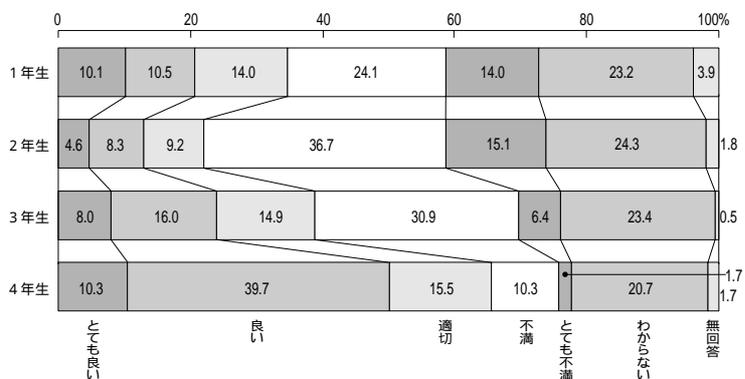
(3) A 今の班分けに関して

1～3年生では、各学年とも「適切」が最も多く、肯定的な「とても良い」「良い」「適切」を合わせた割合は、1年生61.9%、2年生66.4%、3年生61.7%と、ほぼ横ばいである。しかし、選択制である4年生では、これが43.1%まで下がる。結果として、「不満」34.5%と最も多くなっていることが特徴である。

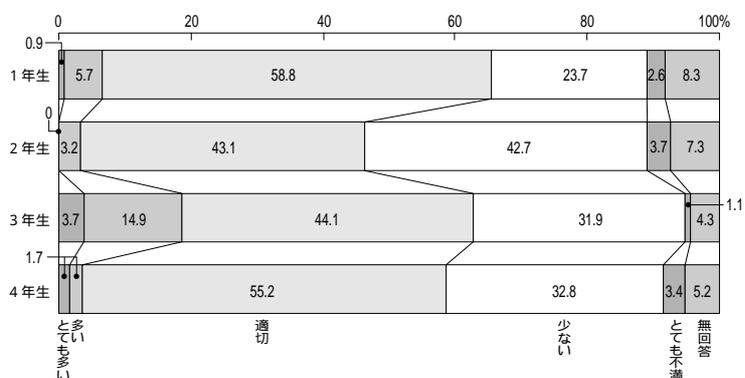


(3) B 先生が前・後期で変わることへの評価

これについても、肯定的な「とても良い」「良い」「適切」を合わせた割合でみると、1年生39.5%、2年生63.3%、3年生80.4%と急激に上昇し、選択制の4年生においても79.3%とほぼ3年生と変化はない。学年が上がるにつれ、この点について肯定されていることがわかる。



(3) C 先生が課題ごとに変わることへの評価
同様に、肯定的な「とても良い」「良い」「適切」を合わせた割合でみると、1年生34.6%、2年生22.1%、3年生38.9%となる。2年生では一時的にこれを肯定する割合が低下する。総体として、3学年まではあまり肯定的でない。しかし、4年生ではこれが65.5%となり、課題ごとに変わるという意向が他学年より強いことがうかがわれる。

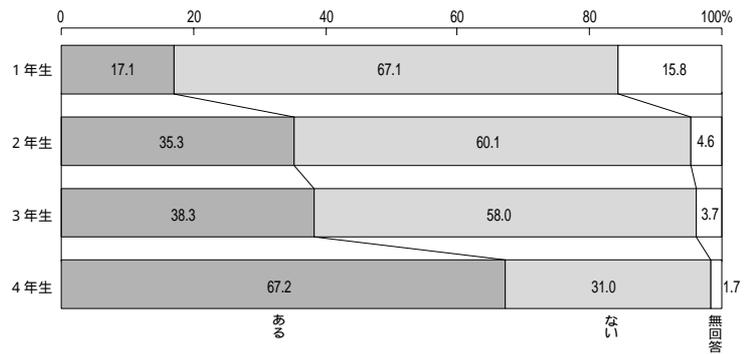


(3) 指導回数への評価

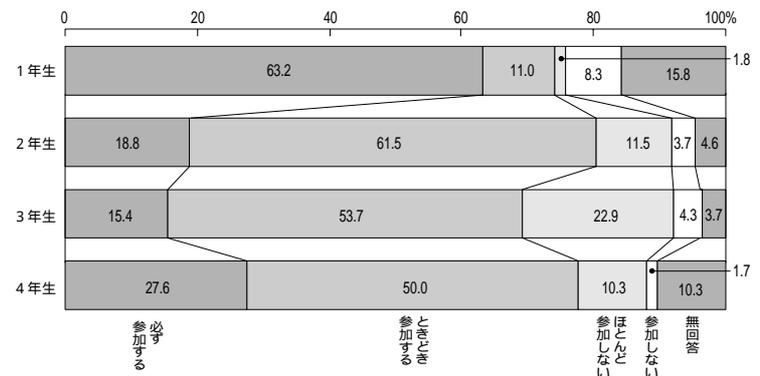
肯定的な「とても良い」「良い」「適切」を合わせた割合と、否定的な「少ない」「とても不満」を合わせた割合を比較してみる。1年生では肯定65.4%、否定26.3%と圧倒的に肯定が多いが、2年生では肯定46.3%、否定46.4%と相半ばし、3年生では再び、肯定62.7%、否定33.0%と肯定する率が高くなる。

1,2年生では、肯定的な者が過半数を占めるが、2年生では必ずしもそのような結果にはなっていない。4年生では、肯定58.6%、否定36.2%と肯定する者が多いが、1,3年生と比較すると、肯定する割合はやや減少する。

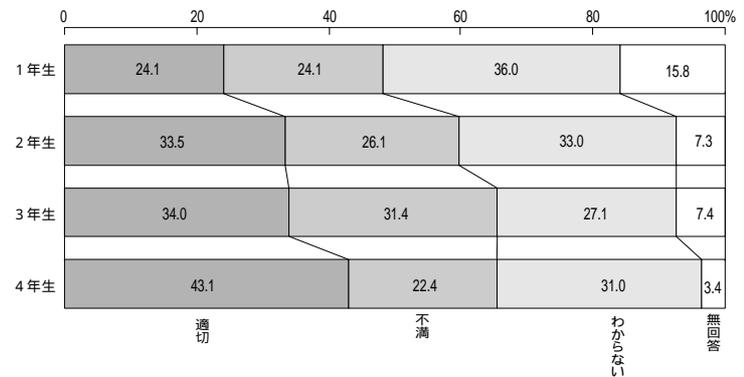
(3) A 講評会で発表したことがあるか
 1年生では「ある」17.1%であるが、2～3年生では、35.3%、38.3%と急増する。4年生では67.2%と過半数が発表したことがある。



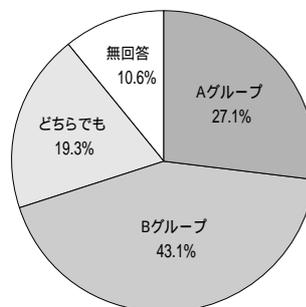
(3) B 講評会への参加
 1年生では、「必ず参加する」が63.2%とたいへん多く、「ときどき参加する」を含めると74.2%となる。しかし、2年生では「必ず参加する」は18.8%、3年生15.4%と1年生と比較すると急激に減少するが、「ときどき参加する」が増加するため、これを合わせたものでは2年生80.3%、3年生69.1%と、1年生と比較して少なくなく、むしろ増加している。
 4年生では、「必ず参加する」「ときどき参加する」を合わせると77.6%である。



(4) 採点結果について
 「適切」の割合は1年生で24.1%、その後学年が上がるにつれて増加し、2年生33.5%、3年生34.0%となり、4年生では43.1%となった。1年生では不満とする者が24.1%と多いが、「わからない」と答えた者も各学年の中で最も多い。



新カリキュラムにおいてどちらのグループに入りたいか(回答対象2年生のみ)
 最も多いのは、『広範な建築設計において主に計画とデザインを学ぶことを指向した』Bグループ」を指向する者が43.1%であり、『建築設計の基本を着実に身につけることを指向する』Aグループ」を指向する者は27.1%であった。「どちらでもよい」は19.3%となっている。



担当： 助手 八藤後 猛

日本建築学会「優秀卒業論文賞」

教室から応募した2編の卒業論文が1999年度(第10回)の日本建築学会「優秀卒業論文賞」を受賞した。表彰式は、本年度の建築学会大会にあわせて、さる9月17日(金)の夕刻、広島大学東広島キャンパス総合科学部棟で行われ、尾島俊雄会長から表彰状と記念品が授与された。受賞論文は大会期間中、9月17日～19日まで会場に展示された。表彰された学生諸君は同日、引き続き賀茂鶴酒造・吉富蔵で行われた大会懇親会に招待され、安芸西条の杜氏料理を満喫した。以下に受賞論文の概要を紹介する。

地盤免震の実験および応用に関する基礎的研究

山崎 貞弘 (現: 欄竹中工務店)

指導: 石丸辰治教授
新谷隆弘専任講師

免震構造の採用により、地震時に人命のみならず建物や設備の破損防止等の高い対地震性能も付与できるということは、広く一般にも知られている。しかし、現在の免震構造技術では、軟弱地盤上に免震構造を構築するとコストがかかるわりに若干、効果の低下は否めない。本研究はこうした現況を考えて、軟弱地盤に適した免震構造、具体的には杭-地盤改良体-ダンパーの複合系により地盤そのものを免震化する「地盤免震」システムを提案したものである。

このシステムは、まず軟弱地盤上の構造物を杭で支持する際に、杭の上部を二重管構造とするなどの方法で杭の上部では変形を拘束しないようにする。これにより杭が長柱として作用するため水平剛性が小さくなり、積層ゴム支承のようなアイソレータとして機能させることができる。また、構造物周辺の軟弱地盤に構造物とは切り離して地盤改良を施し、この地盤改良体と構造物との間にダンパーを設置するものである。

本論ではこのシステムの可能性を検証するため、上記のような実模型を作成、自由振動実験、動的地盤加振実験、静的加力実験を行っている。その結果、杭の一部を二重鋼管にすることで長周期化し、地盤改良体と建物の位相差を利用することによりエネルギー効果を高めるといった「地盤免震」システムの実現性を確認しており、学会で高く評価されたものである。

リバース・モーゲージ制度における担保不動産の市街地整備への活用可能性に関する研究

福祉公社の融資相談の事例分析を通して

中田 三保子 (現: 日本大学大学院理工学研究科不動産科学専攻)

指導: 小嶋勝衛教授
根上彰生助教授
宇於崎勝也専任講師

日本は今後、65歳以上の高齢者が総人口の3分の1を超える本格的な高齢社会を迎える。これより予測される課題として、高齢者の居住継続と豊かな老後生活の保障があげられる。その解決策のひとつに、居住する不動産資産を担保に生活資金を融資してもらうリバース・モーゲージ制度がある。

本制度の特徴は、住宅・土地などの不動産を最終的に売却して融資を返済することを前提としている点にあるが、現状ではほとんどのケースが不動産を売却せずに、相続人が金銭で返済を行っている。しかし、今後は本制度の利用者が増加し、あわせて単身高齢者等、相続人がいないケースが増加すると考えられ、担保不動産売却による返済が増えていくと見込まれる。したがって、今後の社会変化も視野に入れ、本制度の需要と関心が高まるものと考えられる。

現在、公的機関で行われている本制度は、福祉対策の一環でもあるため、融資の担保となる不動産売却後の将来利用が考えられている場合は非常に少ない。本研究は、本制度を実施している各福祉公社および地方自治体の運用状況を把握し、融資実施に至るまでの問題点を探り、より一層の普及と、本制度が高齢者個人のみならず地域社会への利益還元にも寄与できる制度として確立することを目指すものである。現状での融資が実施されていない代表的な理由は、「資産評価不足」と「連帯保証人の不足」、「相続人の同意が得られない」であるが、担保不動産の公共施設利用を想定することで事実上融資要件の緩和が行われたり、最終的に財団法人に取得されて公共利用に供された事例が認められた。さらに、新宿区の相談事例の中に、公園・福祉施設として利用できる可能性のあるものをシミュレーション分析により見出すことができた。

以上より、要件緩和で本制度が普及し、公共施設を中心とした市街地整備への寄与も今後期待できることを導き出している。



trans-architecture

アストリッド・クライン

Mark and myself were recently asked to give a talk as part of a series on the subject of trans-architecture. 'trans' as in crossing borders, overstepping boundaries between different fields.

It occurred to us that we had been crossing borders all along in more than one sense:

Between us we've studied and worked in 6 countries. While at the Royal College of Art we didn't study purely architecture, we often hung out in the other departments, such as sculpture, glass or jewelry departments for example. Having all these resources around us we wanted to use them and let them trans-pire into our projects. Likewise it has become natural for us to approach architecture in this way too.

For some strange reason we don't seem to be able to take a break from our job. Whether it's after work, during the weekend or a holiday we are always surrounded by buildings, furniture or objects. Consciously or subconsciously our eyes are constantly scanning the surroundings and invariably get caught up studying some detail. Architecture for us is not a 9-5 job, it is a lifestyle where inspiration may come from a scene in a film, from colours in a painting, from an installation in a gallery or from the a particular surface material of a nabe pan, bought in some shotengai. Rather than going directly from A to B on the way to a meeting, we often try to get lost in the back streets (that's

why we are always late!) where maybe, if we are lucky we will discover the unexpected.

At Paul Smith's exhibition in Tokyo last year it was great to see a sentence he had written which read 'if you cannot find inspiration around you... then you are not looking hard enough'.

It is always more interesting to experience something new or different (the shin hatsu bai disease we have caught from Japan) whether music, fashion, film or even food, letting that 'transcend' into our own field.

Again the creation of DELUXE, an old warehouse space in Azabu Juban where we share offices with interior designers, graphic designers, sound editors, a DJ cum CG designer and beer brewers, the latter being the best to facilitate 'trans' in every sense - we have to be careful not to sound like drunk party goers, but we firmly believe that quality architecture comes from a quality environment, which definitely includes enjoyment!

It is in this vain that we hope to create environments which of course respect all aspects of the brief and are appropriate in time and place, but most of all 'move' you by their message and hopefully make you smile.

(非常勤講師・建築設計製図 , 設計演習)



UK98 pavilion
IDÉE
WORKSTATION



空間のエロティシズム

濱 寄 良 実



数年前の春、ロシア国立管弦楽団の来日公演での出来事である。演目は確かスクリャーピンの「法悦の詩」、そしてチャイコフスキーの交響曲第五番であった。ともかく「法悦の詩」を楽しみにしていた。その演奏は立派なものであった、と思う。そしてロシアのオケの重厚な響きを存分に堪能し、贅沢な時を過ごしていることを実感しながらホワイエでワイン・グラスを揺らしていた、のだと思う。決してお酒のせいなどではないのだが、全く覚えていないのだ。そのあと聞いた第五番のフィナーレによって、それまでの記憶がすべて吹き飛んだ。このとき初めて、音楽は決して耳だけで聞いているのではないということを思い知らされた。

身体に電流が走った、という大袈裟に聞こえるかもしれないが、本当にそんな感覚であった。涙が出るほどすばらしかった。そのとき、身体は文字どおり音楽に包まれ、音が直接皮膚に触れてくるのが分かった。それはとてもエロティックな体験であった。

空間のエロティシズム、あるいはエロティックな空間。そんなものが創れないだろうか。漠然と、しかし大真面目にそう考え始めたのは、今から10年ほど前のことである。実務に就いてからおよそ4年経つ。その間、10余りのプロジェクトに携わり、約半分が実現した。日常の作業を振り返ると、この10年ほど前の思いが常に頭の片隅のどこかにあったような気がする。

建築にも音楽の場合と全く同じことが言えると考えている。建築は映像ではない。あくまでも身体を包み込む

空間なのである。建築は場面が織り成すモンターージュとして構成されたものでなく、つまり単なる視覚芸術でないのはいうまでもないことだが、ある空間に身を置いて、それを強く認識したことがあるだろうか。そのような建築にはなかなかお目にかかることはできない。

希な経験だが空間の力を感じたことがある。空間の力、それはヴォリュームであったり、その構成要素（色やかたち）であったり、さまざまな数値と物性の魔術とでも言うべきものなのだろうが、やはり音楽と同様に皮膚に直接的に伝わるもののように思う。

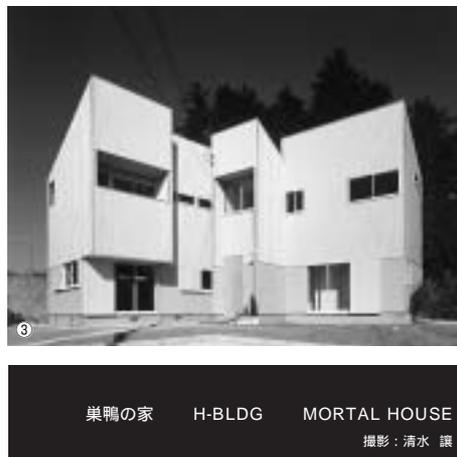
ともかく皮膚に伝わるような空間を創りたい。そんなことに執着し、思考しながら作業を進めている。

いつの日か直接指で産毛を撫でるような、柔らかく、あくまでも柔らかく人を包み込む、それでいて力強い空間、そんなエロティックな空間を現出させてみたい。

筆者略歴

濱寄良実(はまざきよしみ)

- 1964年 東京生まれ
- 1989年 日本大学工学部建築学科卒
- 1992年 日本大学大学院理工学研究科博士前期課程修了
- 1993年～ 学校法人中央工学校非常勤講師
- 1996年 日本大学大学院理工学研究科博士後期課程修了
(株)浜崎工務店一級建築士事務所所長
- 1999年～ 日本大学短期大学部非常勤講師



巢鴨の家 H-BLDG MORTAL HOUSE
撮影：清水 譲

1999年度 日本建築学会大会(中国) 建築学科教室関係者発表論文リスト

「20世紀の記憶・21世紀への予感」をテーマに、広島大学東広島キャンパスをメイン会場として1999年度日本建築学会大会が、さる9月17～19日の3日間にわたって開催された。真夏を思わせるヒドイ暑さのなかを、西条駅からバスで約20分、大混雑のバスを降りてからツイテいない人はさらに10分以上、広大なキャンパスを歩かなければ会場となる校舎までたどり着けないという相当不便な場所であったが、今大会参加者は延べ約8,000名、学術講演会では歴代最多の6,158題の研究発表が発表された。年を追って増えつづける膨大な論文集をCD-ROMに収める計画が試行され、会場でサンプル版が配布された。学術委員会では2000年度には本格

的なCD-ROM版を発行する予定である。

わが建築教室でも海外出張など特別な予定のあった先生以外はほぼ全員の先生方が緊張気味の大学院生を連れて広島入り、そのため、大会前日の教授会では建築の教授席に空席が目立った。この春卒業したばかりの大学院OBも研究発表のため広島に集合、あちこちで先輩後輩間のアカデミックな情報交換や議論が行われた。

例年のように本大会で発表された教室関係者の研究論文リストを分野別に整理して以下に示す。学生諸君はこれらの情報から各研究室の研究活動の一端を知り、卒業研究着手の際の参考にさせていただきたい。

(編集委員会)

印 発表者 *印 ポスターセッション

材料施工・防火

- 1041 南極昭和基地無電棟の耐久性 1. 構成部材現況とパネル構成要素の性能
坪内信朗(竹中工務店技研)・半貫敏夫・平山善吉・高橋 拓
- 1042 南極昭和基地無電棟の耐久性 壁パネルの曲げ強度試験
半貫敏夫(日本大)・坪内信朗・高橋 拓・斉藤俊一・平山善吉
- 1043 南極昭和基地居住施設の耐久性 居住棟の復元と耐久性総合調査
岸 明(ミサワホーム総合研)・平山善吉・半貫敏夫・岡村武士・韓 昶
- 1047 南極昭和基地居住施設の耐久性 南極昭和基地第10居住棟の床パネル芯材の強度試験
宮澤裕紀(日本大大学院)・平山善吉・斉藤俊一・佐藤雅也
- 1048 南極昭和基地居住施設の耐久性 木質パネルの強度試験
高橋弘樹(日本大大学院)・韓 昶・半貫敏夫・岡村武士
- 1049 南極昭和基地居住施設の耐久性 木質パネル接合金物のせん断挙動
中村憲正(日本大大学院)・高橋弘樹・半貫敏夫
- 1050 南極昭和基地居住棟の耐久性 南極昭和基地居住棟の実大構造ユニットに関する実験的研究 その1
佐藤雅也(日本大大学院)・平山善吉・斉藤俊一・宮澤裕紀
- 1051 南極昭和基地居住棟の耐久性 南極昭和基地居住棟の実大構造ユニットに関する実験的研究 その2
斉藤俊一(日本大)・平山善吉・宮澤裕紀・佐藤雅也
- 1052 南極昭和基地居住施設の耐久性 基礎コンクリートの強度と中性化
安部 剛(日本大大学院)・内藤正昭・平居孝之・黒野 薫
- 3088 極地における居室の火災性状とマイクロ Fog 消火設備の適用性
鈴木弘昭(ヤマトプロテック)・佐藤 寛・三橋博巳

構造

- 20148 豪雪地域屋根雪荷重の経時変化に関する数値解析的研究 小林篤志(住友金属鉱山)・半貫敏夫
- 20149 建築物の屋根上積雪荷重に関する研究 屋根形状係数について 森本和樹(GA建築設計社)・三橋博巳
- * 20333 建築基礎構造の限界状態設計法に関する研究 擁壁の試設計 菊本由夏(日本コンクリート工業)・安達俊夫・梅野 岳
- * 20337 急速平板載荷試験による地盤評価法について(その1)試験法の概要とその利用 二木幹夫(建設省建築研)・安達俊夫
- * 20338 急速平板載荷試験による地盤評価法について(その2)急速平板載荷試験によるデータの概要 小林東世雄(日本大大学院)・安達俊夫・二木幹夫・小林勝巳・田中伸治
- * 20413 直接基礎のための締め固め砂杭による改良地盤の設計法 中野健二(不動建設)・山本 実・大西智晴・安達俊夫
- * 20414 締め固め砂杭により改良された砂質地盤上の大型平板載荷試験の変形解析 大西智晴(不動建設)・山本 実・中野健二・野津光夫・安達俊夫
- * 20417 セメント系砂質改良土の強度・変形特性(その4.材令がせん断強さに及ぼす影響) 秋山宗崇(三島市役所)・山田雅一・安達俊夫
- * 20418 セメント系砂質改良土の強度・変形特性(その5.繰返しせん断強さ) 山田雅一(日本大)・安達俊夫・秋山宗崇
- 20440 アイスドーム構造のクリープ挙動に対するせん断応力の影響 田中寿幸(石川島播磨重工業)・半貫敏夫
- 20493 補強ケーブルをもつスタジアム屋根架構の構造特性に関する研究(その1)耐風ケーブルの基本的構造性能 埴 祐子(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・金田崇興
- 20494 補強ケーブルをもつスタジアム屋根架構の構造特性に関する研究(その2)地震時におけるケーブルおよびばね機構の効果 金田崇興(竹中工務店)・斎藤公男・岡田 章
- 20497 さいたまスーパーアリーナの設計と施工(その4 コミュニティアリーナガラスカーテンウォール支持テンション架構の設計概要) 原田公明(日建設計)・斎藤公男・小堀 徹・細澤 治
- 20498 大規模ガラスファサードに用いるケーブルガーダーに関する実験的研究(その1)実験概要および施工時の挙動 山川慶二郎(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・今村柳輔・小堀 徹
- 20499 大規模ガラスファサードに用いるケーブルガーダーに関する実験的研究(その2)風荷重時の力学性状および動的性状 知久大輔(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・今村柳輔・山川慶二郎・細澤 治
- 20500 挟み込み式ガラス点支持構法の適用性に関する基礎的研究(その1)研究概要および複層ガラスの基本力学特性 中原英子(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・今村柳輔
- 20501 挟み込み式ガラス点支持構法の適用性に関する基礎的研究(その2)合わせガラスの基本力学特性 今村柳輔(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・中原英子
- 20502 円筒型テンション・グリッド・ドームの力学性状に関する研究(その1)円筒タイプのストリング効果について 鈴木俊勝(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・大野貴信
- 20503 円筒型テンション・グリッド・ドームの力学性状に関する研究(その2)境界条件・形状および補剛ケーブルの影響について 大野貴信(桂設計)・斎藤公男・岡田 章・今村柳輔
- 20507 ストリング内蔵型スペースフレームによるドーム構造の基本的力学特性について(その1)テンセグリッド・トラスによるアーチ構造の力学性状 鈴木 実(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・中村 伸
- 20508 ストリング内蔵型スペースフレームによるドーム構造の基本的力学特性について(その2)基本ユニットの性状と等価梁置換 中村 伸(日本設計)・斎藤公男・岡田 章
- 20509 Tensegric Truss Domeの構造特性に関する基礎的研究(その1)2層ケーブル方式によるアーチタイプの基本的力学特性 大塚一成(リクルートコスモス)・斎藤公男・岡田 章・田畑博章
- 20510 Tensegric Truss Domeの構造特性に関する基礎的研究(その2)アーチタイプにおける導入PS量の影響と略算手法の提案 鈴木幹彦(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・田畑博章・大塚一成
- 20512 張弦梁構造の座屈長さに関する基礎的研究(その1)研究概要およびストリングによるパネ評価 岡田 章(日本大)・斎藤公男・金子みゆき
- 20513 張弦梁構造の座屈長さに関する基礎的研究(その2)パネ支持された梁の座屈長さの評価 金子みゆき(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章
- 20514 張弦梁構造の座屈長さに関する基礎的研究(その3)束間隔の変動の影響および設計例への適用 塩澤里香(神鋼鋼線工業)・斎藤公男・岡田 章・金子みゆき
- 20515 張弦梁構造の施工計画手法に関する基礎的研究(その1)施工方法および導入PS量の分類 宮里直也(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章

- 20516 張弦梁構造の施工計画手法に関する基礎的研究 (その2) 施工エネルギーに基づく施工方法の評価
浦 映二 (日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・宮里直也
- 20517 アルミニウムかん合形式を用いた張弦格子梁構造の力学特性に関する基礎的研究 (その1) 張弦格子梁構造の提案とPS導入時の挙動について
岡田秀治 (日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・松崎彦英
- 20518 アルミニウムかん合形式を用いた張弦格子梁構造の力学特性に関する基礎的研究 (その2) 付加荷重時の挙動と座屈性状
松崎彦英 (フィグラ)・斎藤公男・岡田 章
- 20522 ストラット式ホルン型矩形膜の曲面形成および構造特性に関する研究 (その1) 裁断方法及びケーブル配置の相違による比較
松田 仁 (神鋼鋼線工業)・斎藤公男・黒木二三夫
- 20523 ストラット式ホルン型矩形膜の曲面形成および構造特性に関する研究 (その2) 応力弛緩性状の実験的検討
鷹羽直樹 (日本大大学院)・斎藤公男・黒木二三夫・松田 仁
- 20535 膜を用いたテンポラリー・スペースに関する研究～モンキーサドルタイプの提案と実践的試み～
村上 隆 (大林組)・斎藤公男・黒木二三夫
- 22195 減衰機構を付加したテンションストリングの動的挙動に関する実験的研究 (その1) 実験計画
竹内 徹 (新日本製鋼)・柴田正樹・中村博志・和田 章・金田勝徳・斎藤公男
- 21115 日本大学理工学部船橋キャンパスの地震動特性 (その1) 地盤のモデル化
安達俊夫 (日本大)・塙 隆憲
- 21116 日本大学理工学部船橋キャンパスの地震動特性 (その2) 入力地震動と地震動特性)
塙 隆憲 (構造ソフト)・安達俊夫
- 21222 上下地動下における鋼構造多層骨組の弾性応答解析
黄 基泰 (東京大)・秋山 宏
- 21327 地盤免震に関する基礎的研究 (その1) 基本概念と静的載荷実験)
吉田明義 (日本大大学院)・石丸辰治・新谷隆弘・森川和彦・魚津忠弘・山崎貞弘
- 21328 地盤免震に関する基礎的研究 (その2) 動特性と簡単な解析モデル)
魚津忠弘 (日本大大学院)・石丸辰治・新谷隆弘・森川和彦・山崎貞弘・吉田明義
- 21329 地盤免震に関する基礎的研究 (その3) 動的相互作用を考慮した解析的検討)
下村幸男 (日本大短大)・大島快仁・石丸辰治・新谷隆弘
- 21462 BMD (Building Mass Damper) 構造物の動特性の抽出と応答予測について その1 動特性の抽出
森川和彦 (日本大大学院)・石垣秀典・石丸辰治・江原栄次・新谷隆弘・岡本博通・大庭 章
- 21463 BMD (Building Mass Damper) 構造物の動特性の抽出と応答予測について その2 疑似モーダルアナリシスの応答計算
大庭 章 (日本大大学院)・石垣秀典・石丸辰治・江原栄次・新谷隆弘・岡本博通・森川和彦
- 21512 増幅機構を用いた制震構造システムに関する基礎的研究 (その5) 粘性ダンパーと弾塑性ダンパーを併用した制震性能)
秦 一平 (日本大大学院)・石丸辰治・新谷隆弘・久保田雅春
- 21523 板バネを利用した安定・不安定連結振子式HMDの開発 (その1) 装置概要および磁気ダンパ性能試験)
中村 豊 (鉄建建設技研)・新谷隆弘・石丸辰治・森本 仁・林 郁夫
- 21524 板バネを利用した安定・不安定連結振子式HMDの開発 (その2) 基本性能確認試験)
林 郁夫 (鉄建建設技研)・新谷隆弘・石丸辰治・森本 仁・中村 豊
- * 21590 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験 (. RCCV 耐震実証試験) その5. 試験体と試験手順
高橋敏夫 (鹿島建設)・後藤政志・長谷川歳恭・平川啓司・鶴巻静雄・秋山 宏・瀧口克己
- * 21591 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験 (. RCCV 耐震実証試験) その6. 加振試験結果 ()
岡田敬一 (清水建設)・中島政隆・斎藤知生・佐藤修央・鶴巻静雄・秋山 宏・瀧口克己
- * 21592 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験 (. RCCV 耐震実証試験) その7. 加振試験結果 ()
田中良三 (清水建設)・藤井 誠・柴 慶治・中村雅彦・鶴巻静雄・秋山 宏・瀧口克己
- * 21593 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験 (. RCCV 耐震実証試験) その8. ピッチングの影響除去法と減衰定数評価法
内藤幸雄 (鹿島建設)・片山 洋・三枝 努・早川 崇・鶴巻静雄・秋山 宏・瀧口克己
- * 21594 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験 (. RCCV 耐震実証試験) その9. シミュレーション解析 ()
平間敏彦 (清水建設)・星野克征・長谷川俊昭・兼近 稔・鶴巻静雄・秋山 宏・瀧口克己
- * 21595 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験 (. RCCV 耐震実証試験) その10. シミュレーション解析 ()
鈴木 篤 (原子力発電技術機構)・中島政隆・小林俊夫・平間敏彦・鶴巻静雄・秋山 宏・瀧口克己
- * 21596 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験 (. RCCV 耐震実証試験) その11. 振動台上波の再現性の検討
小林俊夫 (鹿島建設)・片山 洋・鈴木 篤・田中良三・鶴巻静雄・秋山 宏・瀧口克己
- * 21597 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験 (. RCCV 耐震実証試験) その12. 耐圧・気密試験結果
山中久幸 (石川島播磨重工業)・広田吾一・長谷川歳恭・高橋敏夫・熊谷仁志・鶴巻静雄・秋山 宏・瀧口克己
- * 21598 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験 (. PCCV 耐震実証試験) その12. 静的解析による評価
鶴巻静雄 (原子力発電技術機構)・佐藤邦彦・江戸宏彰・竹内義高・秋山 宏・瀧口克己

- * 21599 コンクリート製原子炉格納容器耐震実証試験（PCCV耐震実証試験）その13．動的解析による評価
中村 進（大林組）・津田和明・鶴巻静雄・佐藤邦彦・秋山 宏・瀧口克己
- 22410 アンボンドプレースの動的性能に関する実験的研究（その1．実験計画と結果概要）
長谷川久巳（新日本製鐵）・竹内 徹・岩田 衛・山田 哲・秋山 宏
- 22411 アンボンドプレースの動的性能に関する実験的研究（その2．実験結果）
原田昭穂（新日本製鐵）・長谷川久巳・竹内 徹・岩田 衛・山田 哲・秋山 宏
- 22465 鋼構造梁降伏型骨組の梁部材の損傷分布
的場真樹（NTTファシリティーズ）・秋山 宏
- 22466 柔剛混合構造多層骨組の損傷集中特性
邵 立（清水建設技研）・高橋 誠・秋山 宏
- 23093 中高層集合住宅を対象とした制震改修法に関する一連の研究（その1）制震改修設計検討の全体概要
長岡 徹（住宅・都市整備公団）・渡辺一弘・石丸辰治・関松太郎・嶺脇重雄・北嶋圭二
- 23094 中高層集合住宅を対象とした制震改修法に関する一連の研究（その2）ダンパー付加系のエネルギースペクトルの統計的実験式について
吉田泰光（日本大大学院）・石丸辰治・平野賢司・渡辺一弘・長岡 徹
- 23095 中高層集合住宅を対象とした制震改修法に関する一連の研究（その3）性能設計の図式解法について
平野賢司（三菱製鋼）・石丸辰治・吉田泰光・渡辺一弘・長岡 徹
- 23097 中高層集合住宅を対象とした制震改修法に関する一連の研究（その5）制震システム付加型の設計検討事例
関松太郎（大林組技研）・嶺脇重雄・北嶋圭二・長岡 徹・石丸辰治
- 23098 中高層集合住宅を対象とした制震改修法に関する一連の研究（その6）制震装置付加型の設計検討事例
嶺脇重雄（竹中工務店技研）・長岡 徹・関松太郎・渡辺一弘・北嶋圭二・石丸辰治
- 23257 ファイバー法を用いた非線形地震応答解析に基づくRC建物の損傷評価（その4）付着すべり挙動の非線形FE解析
井上博登（日本大大学院）・白井伸明・森泉和人・寺沢浩一
- 23284 コンクリートの引張軟化特性と微視破壊挙動（その1）AE法を併用したくさび挿入試験
田嶋和樹（日本大大学院）・白井伸明・森泉和人・上岡 響・寺沢浩一・森谷 寛
- 23285 コンクリートの引張軟化特性と微視破壊挙動（その2）引張軟化特性およびAE源位置標定
森谷 寛（日本大大学院）・白井伸明・森泉和人・上岡 響・田嶋和樹・寺沢浩一
- 23286 コンクリートの引張軟化特性と微視破壊挙動（その3）粒子モデルによる破壊解析
上岡 響（日本大大学院）・白井伸明・森泉和人・田嶋和樹・寺沢浩一・森谷 寛
- 23289 コンクリートの引張軟化特性を考慮したRC耐震壁のFEM解析
渡部 憲（東急建設技研）・白井伸明・大岡督尚・豊田将文・吉田徳雄
- 23400 変形成成分離型モデルを用いたRC部材の変形性能解析（その1）変形成成分離型モデルの提案
寺沢浩一（日本大大学院）・白井伸明・森泉和人・佐伯昭博
- 23401 変形成成分離型モデルを用いたRC部材の変形性能解析（その2）RC造柱の変形性能解析
佐伯昭博（東京電力）・白井伸明・森泉和人・寺沢浩一
- 23465 鉄筋コンクリート造有孔梁に関する実験的研究 開孔補強について
三橋博巳（日本大）・林 静雄・清水 泰・香取慶一
- 23469 昭和基地の骨材を用いたアルミナセメント鉄筋コンクリート梁の終局強度（一般の鉄筋コンクリート梁との比較）
内藤正昭（日本大短大）・平山善吉
- 23490 ト型試験体と架構試験体の接合部の力学的挙動（その3．解析結果との比較）
浜原正行（日本大）・岡田 満・飯田誠次郎
- 23546 プレキャスト型枠工法を用いたプレテンション・ポストテンション合成梁の力学的挙動に関する実験的研究（その1 実験概要及び実験結果）
山本剛史（日本大大学院）・屋田研郎・本岡順二郎・中山 優
- 23547 プレキャスト型枠工法を用いたプレテンション・ポストテンション合成梁の力学的挙動に関する実験的研究（その2 実験結果の検討）
屋田研郎（ピー・エス）・山本剛史・本岡順二郎・中山 優

環境工学

- 40002 音声伝達性能を表わす物理測定・評価法の問題点について
橋本 修（日本大）・木村 翔
- 40008 残響音場における発声レートの変化が三連音節明瞭度、了解度に及ぼす影響
上原 薫（日本大大学院）・木村 翔・橋本 修・佐藤正之
- 40009 会話音声の発声レートの特徴を考慮した物理的音声伝達性能評価法に関する基礎的研究
佐藤正之（建材試験センター）・木村 翔・橋本 修・上原 薫・井戸覚道

- 40013 前方反射音，直接音レベルが音に包まれた感じに及ぼす影響の基礎的検討
佐藤豊成（日本大大学院）・木村 翔・橋本 修・羽入敏樹・星 和磨
- 40014 反射音のレベルバランスが音に包まれた感じに及ぼす影響の検討
星 和磨（日本大大学院）・佐藤豊成・木村 翔・羽入敏樹
- 40021 1/50 音響模型実験における空気吸収の取り扱いに関する基礎的検討
室橋又也（日本大大学院）・関口克明・羽入敏樹・鎌倉貴志
- 40022 1/50 縮尺音響模型実験と虚像法による室内音場評価の基礎的検討
佐竹 康（日本大大学院）・関口克明・羽入敏樹・鎌倉貴志
- 40023 音場予測の逆問題としての仮想音源分布による仮想壁面分布の算出
羽入敏樹（日本大）・木村 翔・橋本 修・横山恵津子
- 40024 壁面の法線ベクトルの空間分布による基本室形の検討
横山恵津子（デジタルハリウッド）・木村 翔・橋本 修・羽入敏樹
- 40025 室内音場の過渡応答における拡散音の分離抽出と拡散性に関する検討
鎌倉貴志（日本大大学院）・関口克明・羽入敏樹
- 40043 集合住宅居住者の音環境と周辺住環境に対する意識
武田充弘（日本大大学院）・木村 翔・井上勝夫
- 40046 趣味・価値観・日常生活行動からみた商業空間の利用者タイプの分類
明智 都（日本大大学院）・木村 翔・荘 美知子・唐沢 亮
- 40047 商業空間の音環境に対する実態評価と趣味・価値観から分類した利用者タイプの対応《商業空間の音環境に対する利用者意識に関する研究（その5）》
唐沢 亮（フジタ）・木村 翔・荘 美知子・明智 都
- 40048 建設工事作業従事者に対する個人暴露騒音レベルの実態調査結果《労働環境騒音の実態と評価に関する研究（その1）》
宮田央恵（ゾーンプランニング・パトス）・木村 翔・荘 美知子
- 40049 建設工事各種作業従事者の騒音暴露レベルとヒアリング調査《労働環境騒音の実態と評価に関する研究（その2）》
荘 美知子（日本大）・木村 翔・宮田央恵
- 40064 住宅の品質確保の促進等に関する法律（案）における音環境性能規定 住宅性能表示制度（案）の概要紹介 その2
福島寛和（建設省建築研）・溝淵木綿子・井上勝夫・安岡正人
- 40065 標準重量床衝撃源の衝撃力特性に関する温度依存性 その1：実験装置及び実験方法
阿部恭子（建材試験センター）・井上勝夫・安岡正人
- 40066 標準重量床衝撃源の衝撃力特性に関する温度依存性 その2：実験結果の考察
安岡正人（東京理科大）・井上勝夫・阿部恭子
- 40067 標準重量床衝撃源の衝撃力特性に関する温度依存性 その3：床衝撃音による検討
井上勝夫（日本大）・阿部恭子・安岡正人
- 40068 集合住宅の竣工時における遮音性能測定について 床衝撃音レベル短時間測定の試みおよび新衝撃源とタイヤの特徴
赤尾伸一（三井建設技研）・岩本 毅・安岡博人・矢野博夫・井上勝夫・橋 秀樹・中村智幸
- 40072 住宅の床仕上げ構造のへこみ感と動的振動応答物理量との関係（歩行感からみた居住床の適正弾性と床衝撃音遮断性能に関する研究：その18）
渡辺秀夫（戸田建設技研）・木村 翔・井上勝夫・松岡明彦
- 40073 人の歩行状態を再現する歩行衝撃シミュレータの開発に関する研究
中川志郎（大成建設）・木村 翔・井上勝夫・富田隆太
- 40074 歩行衝撃シミュレータによる各種床仕上げ構造の動的変位量の計測
富田隆太（日本大大学院）・木村 翔・井上勝夫・中川志郎
- 40080 室形状と吸音面を変えた場合の重量床衝撃音に対する下室空間音圧分布の検討
松澤友貴（日本大大学院）・木村 翔・井上勝夫・中澤真司・木村英樹
- 40082 大型スラブを対象とした床衝撃時の振動応答特性に関する実験的検討
山内 崇（日本大大学院）・木村 翔・井上勝夫・中澤真司・中森俊介
- 40083 デッキプレート合成スラブ床構造の重量床衝撃音レベルについて
園田正雄（日鐵建材工業）・舟橋英樹・福田雄一・関根秀生・井上勝夫
- 40088 スチールハウスの重量床衝撃音遮断性能（1） 実験方法及び供試床の仕様 KC型スチールハウスの諸性能に関する研究 その20
太田克也（川崎製鉄）・関根英生・二宮 淳・藤本隆裕・杉本明男・吉村純一・井上勝夫
- 40089 スチールハウスの重量床衝撃音遮断性能 実験結果と検討 スチールハウスの諸性能に関する研究 その21
関根秀生（日東紡音響エンジニアリング）・太田克也・二宮 淳・藤本隆裕・杉本明男・吉村純一・井上勝夫
- 40099 スチールハウス界壁の遮音性能の課題抽出とその改善 KC型スチールハウスの諸性能に関する研究 その19
杉本明男（神戸製鋼機械研）・吉村純一・金子 昇・二宮 淳・藤本隆裕・太田克也・井上勝夫
- 40110 有限音線積分法を用いた回折騒音のシミュレーション予測手法に関する基礎的検討 ～（その1）ウエッジ及び半無限障壁による回折音の計算～
三浦康雄（日本大大学院）・関口克明・羽入敏樹・坪山 睦

- 40111 有限音線積分法を用いた回折騒音のシミュレーション予測手法に関する基礎的検討 ～（その2）二重回折の減衰量の計算～ 坪山 睦（小野測器）・関口克明・羽入敏樹・三浦康雄
- 40120 排水管の振動特性と放射音に関する実験的検討 河原塚 透（大成建設技研）・平松友孝・木村 翔・井上勝夫・大川平一郎
- 40121 管路系における膨張型消音器・フレキシブル継手の発生音・振動低減効果に関する実験的検討 小林裕昌（日本大大学院）・木村 翔・井上勝夫・平松友孝・河原塚 透・大川平一郎
- 40125 建物内振動伝搬特性の実験方法（固体音の建物内伝搬に関する研究：その1） 中澤真司（鉄建建設技研）・井上勝夫・田野正典・縄岡好人・平松友孝・稲留康一
- 40126 建物内振動伝搬特性の実験結果とその検討（固体音の建物内伝搬に関する研究：その2） 稲留康一（奥村組技研）・井上勝夫・田野正典・中澤真司・縄岡好人・平松友孝
- 40382 視環境評価における認知と注視特性の導入に関する研究 その1．評価内容と注視特性からみる認知傾向 合田奈緒子（日本大大学院）・関口克明・川浪大輔・下平裕之
- 40383 視環境評価における認知と注視特性の導入に関する研究 その2．動画像導入による注視特性の検討 下平裕之（日本大大学院）・関口克明・川浪大輔・合田奈緒子
- 40517 中国黄土地域におけるヤオトン（窑洞）の環境調査と持続的発展可能な近代化に関する試み その1．日中共同調査の背景と住環境に関するアンケート調査結果 関口克明（日本大）・吉田 燦・川西利昌・吉野泰子・島宗淳一郎・浅見幸子・加藤未佳
- 40518 中国黄土地域におけるヤオトン（窑洞）の環境調査と持続的発展可能な近代化に関する試み その2．窑洞住戸内外の光・紫外線環境測定結果 川西利昌（日本大）・吉田 燦・関口克明・吉野泰子・島宗淳一郎・浅見幸子・加藤未佳
- 40519 中国黄土地域におけるヤオトン（窑洞）の環境調査と持続的発展可能な近代化に関する試み その3．窑洞住戸内外の温熱環境測定結果 浅見幸子（日本大大学院）・吉田 燦・関口克明・川西利昌・吉野泰子・島宗淳一郎・加藤未佳
- 40520 中国黄土地域におけるヤオトン（窑洞）の環境調査と持続的発展可能な近代化に関する試み その4．窑洞住戸内外の空気質・音環境測定結果 吉野泰子（日本大短大）・吉田 燦・関口克明・川西利昌・島宗淳一郎・浅見幸子・加藤未佳
- 40521 中国黄土地域におけるヤオトン（窑洞）の環境調査と持続的発展可能な近代化に関する試み その5．実測結果に基づく新型ヤオトンの形状に関する検討 加藤未佳（日本大大学院）・吉田 燦・関口克明・川西利昌・吉野泰子・島宗淳一郎・浅見幸子
- 41162 居住下における空間温度の可視化に関する研究 その1 供試体の選定と空間温度測定の概要 菅野哲充（日本大大学院）・関口克明・吉野泰子・田中和之・島宗淳一郎
- 41163 居住下における空間温度の可視化に関する研究 その2 住まい方の相違を反映した計測ツールとしての可能性について 島宗淳一郎（日本大大学院）・関口克明・田中和之・吉野泰子
- 41183 重度重複障害児に見られる体温調節障害について アンケートによる状況調査 三上功生（日本大大学院）・吉田 燦・野村みどり・蜂巢浩生
- 41356 室内濃度予測モデルにおけるSink効果に関する研究 MDF板に対するHCHOについて 金森 基（日本大大学院）・堀木美加・吉澤 晋・池田耕一・熊谷一清
- 41477 実験動物施設の環境制御について（第XX報 ラットの成長に影響を及ぼさない室温制御手法の検討） 板橋友佳（日本大）・吉田 燦・蜂巢浩生・朱宮正剛・吉田一也・石井要憲・長谷川雅一

建築計画

- 5046 野外公演・イベントの開催状況 野外上演施設の現状についての基礎的調査研究（その5） 高波鉄太郎（日本大大学院）・青池佳子・本杉省三
- 5050 公演までの舞台仕込み状況と舞台構成 オペラ上演における舞台空間の使われ方に関する研究（その1） 井上友亮（日本大大学院）・中原慶之・佐藤慎也・本杉省三
- 5051 舞台利用状況と利用面積について オペラ上演における舞台空間の使われ方に関する研究（その2） 中原慶之（東急設計コンサルタント）・佐藤慎也・本杉省三
- 5052 公演時における出演者の動線について オペラ上演における舞台空間の使われ方に関する研究（その3） 青池佳子（日本大大学院）・中原慶之・佐藤慎也・本杉省三
- 5106 小学校に併設された幼稚園の現況に関する考察 新宿区立幼稚園の事例 岡田真人（日本大大学院）・関沢勝一・佐藤直樹

- 5133 『学校通論』の原著 *School Economy* についての一考察 『学校通論』にみる小学校建築計画条件に関する考察 その3 関沢勝一(日本大)・馬渡 龍・新川亮馬
- 5156 JES規格にみる学校建築の「教室」の標準化に関する考察 馬渡 龍(東北大学院)・関沢勝一
- 5175 授産施設, 小規模作業所の施設環境決定要因に関する研究 職業リハビリテーション施設の建築計画に関する研究 2 八藤後 猛(日本大)・野村 歆
- * 5185 東京都区部における特別養護老人ホームの建設動向に関する調査報告 石田道孝(日本大)・今井睦美・小島浩人
- 5243 障害をもつ人のための専用施設におけるプール利用実態について 地域における公共スポーツ施設に関する研究 その8 渡辺富雄(日本大)・若色峰郎・富樫 覚・田丸淳一・野村一路
- 5244 障害をもつ人のためのプール廻りの利用特性について 地域における公共スポーツ施設に関する研究 その9 富樫 覚(山下設計)・渡辺富雄・若色峰郎・野村一路
- 5245 都市部に立地する民間フィットネスクラブの施設調査 「健康志向型運動施設」に関する基礎的研究 その3 富永新吾(日本エアロビックフィットネス協会)・渡辺富雄・若色峰郎・玉木政裕
- 5363 立ち上がり動作実験装置の製作および動作の基礎的研究 便所で立ち上がり動作を補助する手すりの研究 その1 國井清照(日本大大学院)・高橋英如・野村 歆・八藤後 猛
- 5364 立ち上がり動作実験装置の製作および動作の基礎的研究 便所で立ち上がり動作を補助する手すりの研究 その2 高橋英如(新東京国際空港公団)・國井清照・八藤後 猛・野村 歆
- 5417 宮原駅西口広場における視覚障害者誘導装置に関する評価実験 辻 俊光(日本大大学院)・関口克明・吉野泰子・菅野哲充・野村みどり・横山勝樹
- 5550 対話性のある仮想空間での空間把握の過程について 空間把握における仮想体験の影響に関する実験的研究 その1 柳田 武(日本大)・吉川栄治・山根貴志
- 5551 仮想空間での事前学習が探索行動に与える影響について 空間把握における仮想体験の影響に関する実験的研究 その2 吉川栄治(FLP)・柳田 武・山根貴志
- 5605 市街地公的高層住宅団地のラクガキ調査とその方法について 設計・管理及びヴァンダリズムを配慮して 宇杉和夫(日本大)・原 陽介
- 5646 1950年以降の住宅事例からみた玄関まわりの特質に関する一考察 独立住宅のアクセス領域に関する基礎的研究 神沼広治(日本大大学院)・宇杉和夫
- 5690 ホームオフィスの執務空間に関する基礎的研究 スペース確保方法の違いによる満足度の検証 島崎 武(大宮市役所)・野村 歆・八藤後 猛
- 5712 ビデオ解析手法による調理動作の研究 ビデオ解析手法による日常生活動作に関する基礎的研究 その3 野村 歆(日本大)・八藤後 猛・田中 賢
- 5713 調理動作に影響を与える要因に関する研究 ビデオ解析手法による日常生活動作に関する基礎的研究 その4 田中 賢(積水ハウス)・八藤後 猛・野村 歆
- 5718 シルバーピア居住者の年齢別・居住形態別にみた日常生活状況について シルバーピアの居住状況に関する研究(その1) 村井裕樹(日本大大学院)・石川弥栄子・八藤後 猛・野村 歆
- 5719 シルバーピア居住者の在宅福祉サービスの利用状況について シルバーピアの居住状況に関する研究(その2) 石川弥栄子(東京都住宅局)・村井裕樹・八藤後 猛・野村 歆
- 5741 街型集合住宅住棟の計画手法におけるメゾネット住戸供給の研究 首都圏公団住宅供給事例調査を通して 八町公章(アトリエ空間組織)・宇杉和夫
- 5742 多方向アクセス型住戸のタイプと住棟内の位置 ベルコリーヌ南大沢のケーススタディ(その1) 塚部 彰(アトリエ空間組織)・宇杉和夫・紫牟田一魂・八町公章
- 5743 多方向アクセス型住戸周辺空間についての現状と意向 ベルコリーヌ南大沢のケーススタディ(その2) 紫牟田一魂(日本大大学院)・宇杉和夫・塚部 彰・八町公章

都市計画

- 7170 静岡県掛川市における街並み景観形成を目的とした複数の施策・事業間の連携に関する研究 その1. 施策・事業の連携の実態 川島和彦(日本大大学院)・小澤位光・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
- 7171 静岡県掛川市における街並み景観形成を目的とした複数の施策・事業間の連携に関する研究 その2. 施策・事業および協議会の段階的展開について 小澤位光・川島和彦・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也

- 7211 兵庫県出石町における建築物の修景促進に関する研究 その1. 修景の実態と要因の分類
荻野裕子(秩父市役所)・坂倉正洋・川島和彦・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
- 7212 兵庫県出石町における建築物の修景促進に関する研究 その2. 個別条件・地域条件の分析
坂倉正洋(読売江東理工専門学校)・荻野裕子・川島和彦・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
- 7333 リバース・モーゲージ制度の活用可能性に関する研究 その1. 東京都における福祉公社の融資相談事例の分析
劉 銑鍾(日本大大学院)・中田三保子・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
- 7334 リバース・モーゲージ制度の活用可能性に関する研究 その2. 担保不動産の市街地整備への活用可能性
中田三保子(日本大大学院)・劉 銑鍾・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
- 7357 東京都における近隣型商店街の支援事業に関する研究 その1 商店街組合へのヒアリング調査による事業実施後の現況
阿部隆史(銭高組)・鬼山 功・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
- 7358 東京都における近隣型商店街の支援事業に関する研究 その2 商店街来街者に対するヒアリング調査による評価
鬼山 功(日本大大学院)・阿部隆史・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也

建築経済・住宅問題

- 8080 阪神・淡路大震災における建物損害実態の調査研究 その3 建物損害と経年について
若井真幸(技建工務)・小松幸夫・加藤裕久・吉田倬郎・高橋純一・三橋博巳
- 8133 地域対応モデル住宅の作成方法とその役割に関する研究 首都圏のHOPE仕様住宅の実績と評価を通じた考察
原 陽介(日本大大学院)・宇杉和夫

建築歴史・意匠

- 9089 祠堂開口部の補強手法について チャンパ遺跡の実証的研究 その11 重枝 豊(日本大)
- 9090 西方寺の伽藍構成と呼称に関する一考察 ヴェトナム仏教寺院の総合研究 その7
大山亜紀子(日本大大学院)・片桐正夫・重枝 豊
- 9097 クメール建築の開口部とその施工技術について(その1)
片桐正夫(日本大)・崔 炳夏・三輪 悟・石津菜央・高橋正時
- 9098 クメール建築の開口部とその施工技術について(その2) アンコール・ワット様式の窓を中心に
高橋正時(日本大大学院)・片桐正夫・崔 炳夏・三輪 悟・石津菜央
- 9099 クメール建築の開口部とその施工技術について(その3) バイヨン様式の窓を中心に
崔 炳夏(日本大大学院)・片桐正夫・三輪 悟・石津菜央・高橋正時
- 9100 アンコール・ワット西参道の修復経緯について 『アンコール報告書』にみるフランス極東学院の保存活動
石津菜央(日本大大学院)・片桐正夫・崔 炳夏・三輪 悟・高橋正時
- 9101 アンコール・ワット西参道の基礎および内部の構造について 参道東端北側における基礎部の調査結果を中心に
三輪 悟(日本大大学院)・片桐正夫・崔 炳夏・石津菜央・高橋正時
- 9176 蔵田周忠の論考にみる「近代建築」観の推移について 昭和戦前期における3つの体系的論考の比較考察
矢木 敦(日本大大学院)・大川三雄
- 9185 岡田信一郎(1883~1932)の住宅作品にみる特徴について ~国立国会図書館所蔵の設計図書を中心とする考察~
小林文子(日本大大学院)・大川三雄
- 9189 大正・昭和戦前期における住宅庭園の近代化に関する研究 庭園改善運動(1919~1944年)における提案を通して
近田哲也(日本大大学院)・大川三雄
- 9282 戦後におけるアイデア提案型建築設計競技の動向と評価 その2. 住居系, 建築系課題テーマの詳細について
小石川正男(日本大短大)・佐藤 圭

井上勝夫教授は、9月9日(木)、10日(金)、理工学部駿河台校舎で行われた日本騒音制御工学会秋季研究発表会の実行委員長およびシンポジウム「集合住宅の音環境を考える」のパネラーを務めた。

また、石丸辰治教授は同発表会において、「建築物の免震・制震技術」と題して特別講演を行った。

小嶋勝衛教授、根上彰生助教授、宇於崎勝也専任講師、清水威史君(大学院OB)、阿部隆志君(大学院OB)連名の原著論文「特定商業集積整備法による商業施設整備の実態に関する研究 高度商業集積型の事例分析を通して」が、日本建築学会計画系論文No.517(1999.3)に掲載された。

小嶋勝衛教授、根上彰生助教授、宇於崎勝也専任講師、劉銑鐘君(大学院不動産科学専攻)連名の原著論文「東京都におけるリバース・モーゲージ制度の利用実態に関する研究」が日本建築学会計画系論文No.517(1999.3)に掲載された。

秋山宏教授、島崎大氏連名の原著論文「振れを伴う多層構造物の最適強度分布と損傷分布」が、日本建築学会構造系論文No.518(1999.4)に掲載された。

宇杉和夫専任講師の原著論文「日本神話の 鳥生みの生成における空間認識と空間 日本の空間認識と景観構成に関する基礎的研究」が、日本建築学会計画系論文No.518(1999.4)に掲載された。

木村翔教授、荘美知子非常勤講師、唐沢亮君(大学院OB)連名の原著論文「商業空間の音環境に対する利用者意識に関する研究」が、日本建築学会計画系論文No.519(1999.5)に掲載された。

秋山宏教授、山田哲氏、松本由香氏、田中宏志氏、三山剛史氏、寺田岳彦氏連名の原著論文「冷間成形角形鋼管柱の実大振動台実験」が、日本建築学会構造系論文No.521(1999.7)に掲載された。

木村翔教授、橋本修専任講師、広瀬大輔氏連名の原著論文「仮想音源分布を用いて方向別応答を変化させた舞台音場におけるソロ演奏者の主観評価に関する研究」が、日本建築学会計画系論文No.521(1999.7)

教室ぶろむなード

に掲載された。

関口克明教授、羽入敏樹短大助手、鎌倉貴志君(大学院OB)連名の原著論文「受聴点近傍のインパルス応答の変化を考慮した室内音場の定量化方法」が、日本建築学会計画系論文No.521(1999.7)に掲載された。

木村翔教授、井上勝夫教授、矢後佐和子君(大学院OB)連名の原著論文「行動別に見た住宅床のかたさ感覚評価に関する研究」が、日本建築学会計画系論文No.521(1999.7)に掲載された。

秋山宏教授、山田哲氏、松本由香氏、松岡三郎氏、大竹章夫氏、杉本浩一氏連名の原著論文「実大柱梁接合部の試験温度による延性破壊 脆性破壊遷移」が、日本建築学会構造系論文No.522(1999.8)に掲載された。

秋山宏教授、松本由香氏、山田哲氏連名の原著論文「鋼構造柱梁接合部における梁の変形能力とウェブの継手効率」が、日本建築学会構造系論文No.523(1999.9)に掲載された。

第7回習志野ドームが、10月28日に船



橋校舎で行われた。この「習志野ドーム」は、学生を対象としたコンペにより選ばれた優秀な作品を、実際に学生の手で作りに上げることが最大の特徴である。今年も理工学部建築学科、海洋建築工学科、生産工学部建築学科から応募のあった24作品の中から、5作品(写真右上から反時計回りに、「できるかな?」、「あいまいドーム」、「さんれんじゃー」、「Chain Kite」、「海老船」)が選ばれ、斎藤研究室からの参考出品の「Tensegrity Sphere」(写真右下)を加えた計6作品が建設されることになった。9月末のコンペ後、「ドームの会(約200人)」の協力により部材製作を行い、何度かの施工実験を踏まえて当日を迎えた。当日は船橋校舎特有の強風に見舞われたが、数多くの学生の参加により、無事予定通り約6時間で建てることができた。文化祭を含む2週間の展示期間中、多くの人々の目を楽しませてきた6つのドームは、11月10日に解体された。習志野ドームの思い出が残るグラウンドは、次に生まれるであろう新たなドームを待っている。

10月9日(土)に建築学科スポーツ大会(今年もソフトボール)が行われました。優勝はけんちく1A(1年生)チーム、準優勝はレインポー(2年生)チームでした。ファラデーホールで行われた懇親会の席上で、教室主任の斎藤公男教授からそれぞれ賞が授与されました。わがSENKOH(教員)チームは善戦む

なく0勝2敗で、やるからには1等賞のつもりだった僕(佐藤直樹)はちょっとだけアンビリバブルです。でも懇親会では、学生も先生も笑顔で楽しかったので、はなまるの1日でした。来年はきちんと体力をつけてSENKOHチームは、どんなスポーツでも1勝!を目指します。



駿建目次 (1999.11 Vol.27 No.3 通巻107号)	デザイン基礎、建築設計等科目に 関する調査結果	2	1999年度日本建築学会大会(中国) 建築学科教室関係者発表論文リスト	12
	日本建築学会「優秀卒業論文賞」	9	教室ぶろむなード	20
	私と作品	10		

『駿建』 発行者・斎藤公男：千代田区神田駿河台1-8 日本大学理工学部建築学科教室 Tel.03(3259)0724 <http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>
 平成11年度編集委員：半貫敏夫・岡田 章・大川三雄・蜂巣浩生・羽入敏樹 印刷：奥村印刷株